

教皇フランシスコと話をしよう

教皇と学生が映像で対話

12月18日、映像回線を通じて、本学ほか学校法人上智学院が運営する学校の学生・生徒と教皇フランシスコが対話する「教皇フランシスコと話をしよう」が行われ、約700人が来場した。



教皇フランシスコは、本学の設立母体であるカトリック・イエズス会出身の初の教皇。神学部のホアン・アイダル教授が、母国アルゼンチンの神学校時代に当時神学院院长であった教皇から直接薫陶を受けた縁から、教皇と直接交渉して本企画の実現に至った。当日はカトリック学生の会会長の山本健一郎さん（神神3）の司会で始まり、冒頭、暁道佳明学長は「上智学院をはじめ、カトリック精神を共有する人々が一堂に会し、同じ時間、空間の中で教皇の話を聴くことのできる経験は大変意義深い。『他者のために、他者とともに』という思いが込められた教皇のメッセージを、多くの方々と共有してほしい」と挨拶した。

問いかけに笑顔で応える教皇

選ばれた8人が一人ずつ質問

来場者全員で歌のプレゼント

最後に、上智聖歌隊のリードで来場者全員による聖歌「あめのみつかいの」と、前日の12月17日に81歳の誕生日を迎えた教皇を祝して、スペイン語による「Happy Birthday」の2曲を歌い、大盛況のうちに終会となった。

本企画の統括責任者を務めたサリ・アガステイン学生総務担当副学長は、「教皇がこのような形で日本の大学と対話の機会を設けるのは初めてであり、イエズス会の教

育機関である本学だからこそ実現できた企画だ。参加した学生たちが教皇の人柄に触れ、そのメッセージが心に刻まれる貴重な機会となったのではないかと振り返った。

長させる。それには、知性、感情、労働を調和させることが必要だ。さらに教育には他者に奉仕するという視点がなければならぬ。上智大学は、他者に奉仕する精神を有しているが、それはとても豊かなことだ」

は非常に参考になる」
▼チョウ・トゥ・アンさん（地球環境学専攻博前1、ミャンマーからの留学生）「今の世界にとって、宗教の重要性はどこにあるか」

具体的に何が必要か」
教皇「今人類は、環境保全に真剣に取り組むのか、さもなければ滅びるかという厳しい選択を迫られている。環境問題の要因は、経済や金融至上主義によるもので、環境バランスを考えずに開発を続けることが問題だ。『ラウター・シ』

本学学生と教皇との対話

▼吉田南菜子さん（神神3）「教皇に選出されてから一番嬉しかったことは何か」

とと私自身が若返るような気分となり、それが嬉しさの源となっている」

教皇「世の中のスピードが速すぎるため、若者が自分のルーツを失っていることが大きな心配だ。ここで言うルーツは、文化、歴史、家族、人間としてのルーツのこと

教皇「宗教は、元々は人の心の中にあり、自身自身の考えから発展した。その中から絶対的なもの、すなわち神を見出すのが、それは存在を超越したものだ。あらゆる宗教は人を成長させるが、それは他者に奉仕するものでなければ宗教とは言えない。何か見返りを求めるとすればそれは偽善である」

（回勅）には、環境だけでなく社会問題についても触れている。環境と社会は切り離せないものなのだ」

教皇「嬉しいことといふのは一つのことではない。多くの喜び、それは人々と挨拶し、語り合

▼豊田充さん（理工学専攻機械工学領域博後2）「大学における勉強の目的はなにか」

教皇「出世や成功だけを追い求める教育は、人を成長させるどころか小さくしてしまう。協調の

▼小早川麻美さん（外西4、スペイン語で質問）「貧困の削減と環境保全を同時に達成するには、

喜びとなる。人々と接す

を成長させるどころか小さくしてしまう。協調の

黒澤明の『八月の狂詩曲』

を同時に達成するには、